

## 世界を旅する

### — 家島彦一『イブン・バットゥータの世界大旅行』 —

子供の頃から旅番組好きで兼高かおる『世界の旅』『遠くに行きたい』は欠かさず見た。外国映画好きも結局、欧米をはじめ世界を見たいからだったかもしれない。フルブライト留学生の一九五〇年代旅行記は愛読書で、わずか三十ドルの所持金で西海岸から東海岸へのバス旅やコイン式カフェテリア紹介は六十年たっても鮮明に覚えている。(菊地実)

#### それぞれの旅

「旅」という言葉から人は何を思いうかべるのか。西行法師や芭蕉翁のような漂泊の旅／創作。メッカ・エルサレムや四国八十八番巡り／宗教的巡礼。英国貴族のグランドツアーや修学旅行／学習。冒険漂泊からお気楽観光まで旅は広く多彩だ。十九世紀、鉄道蒸気船登場で旅は一変した。それまでの徒歩＋馬・駱駝＋帆船の旅が機械による移動で『八十日間世界一周』が実現した。二十世紀には自動車＋飛行機が登場しマスツーリズムが成立した。私事になるがレジャー研究で研究員人生をスタートした私にとって「旅」は常に関心の高いテーマだった。また観光は多くの産業連関が絡んだ最大のサービス産業に成長している。

#### <図表1>本書の目次

序章	イスラームと旅・移動
第1章	拡大する一三・一四世紀のイスラーム世界
第2章	『大旅行記』という書物
第3章	イブン・バットゥータの旅 (1) —タンジールからメッカまで
第4章	(2) —中東世界からキプチャク大草原へ
第5章	(3) —中央アジアとインド
第6章	(4) —東南アジアと中国
第7章	(5) —アンダルスとブラック・アフリカ
結び	イブン・バットゥータの旅の虚像と実像



<平凡社ライブラリ>

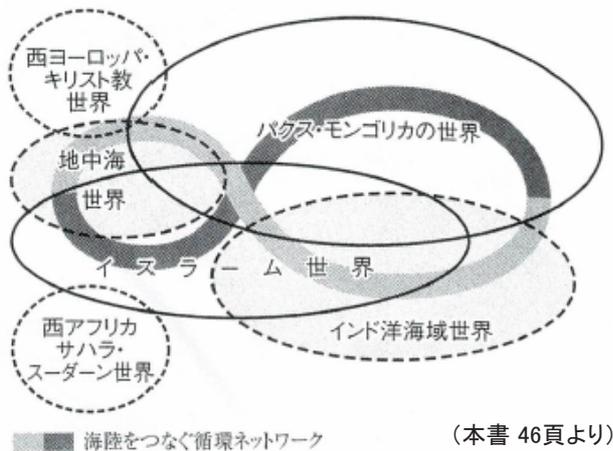
#### 十四世紀の世界を旅する

世界の大家旅行家というと三蔵法師(『西遊記』)やマルコ・ポーロが思い浮かぶが、何と言っても何十年にもわたりアフリカ・アジアを広く旅したイブン・バットゥータが挙げられる<図表1>。バットゥータの名前は高校生の世界史教科書で知り、大学時代東西交渉史講義で詳細を知った。

「彼は常に自らの眼で観察し。体験することに無上の喜びを感じる遍歴の人だ」(11頁)と旅の目的を規定する。13・14世紀は「パクス・モンゴリカの世界と既存のイスラーム世界とが相互に交流を深めて、ユーラシアとアフリカの諸地域を広く覆う国際的交通システムが成立

していた」(112頁)。同時に「中東社会に生まれたイスラーム教とその社会もまた、中東的移動文化の性格を色濃く帯びており、商人・職人・知識人・巡礼者・修行僧・遊牧民などの〈移動の民〉が中心となって・・・広域的な情報交流と文化的コミュニケーションのネットワークを作り上げた」(20頁)〈図表2〉。

〈図表2〉14世紀の国際交易ネットワーク



### 巡礼と国際交易

「イスラーム王朝の対立・敵対の関係を巧みに利用しながら国際交易に活躍したのは〈カーリミー〉と呼ばれるイスラーム教徒の商人集団(一部にユダヤ教徒からの改宗者も含まれる)・・・別称が〈胡椒と香料の商人〉として知られる。・・・カーリミー商人たちの商業ネットワークは、アレクサンドリアから・・・インド西南海岸のカーリクートにまたがる」(58-60頁)

「アラビア語ではキャラバン隊に同行する旅仲間の

ことをラフィータという・・・多くの場合、ラフィータは気心知れた同郷の者が多く・・・バトゥータはキャラバン仲間の娘と結婚」(113-4頁)とそこには今日の観光とは全く異なる景色が見える。

またアレクサンドリアは「西のイスラーム世界(マグリブ)と東のイスラーム世界(マシュリク)をわかつ」(117頁)としている。

### 三十年にわたる大旅行

本書は三十年にわたる大旅行を年代別に整理し、さらには〈旅行記〉が成立する書誌研究にも触れている。実をいうと私は平凡社東洋文庫・イブン・バトゥータの『大旅行記』全八巻(家島氏完訳)を所有していたが、部分的な拾い読みしかしていない。モルディブやスリランカが特に印象に残っているものの、今手元にはない。マルコ・ポーロも一時期「本当は旅していない」というデマ説が流れた。バトゥータも「虚言」と言われ奇談が多く、シーア派批判も含めて禁書扱いになっていた。

訳者は「旅行記・・・マグリブ人の眼で、現実主義的な人間らしさに富む等身大の眼から、他の世界、特にマシュリクその他の世界を見ていること」と高く評価している。

なを最後に『コーラン／クルアーン』を初めて翻訳した井筒俊彦、はじめてバトゥータを翻訳紹介した前島信次(『千夜一夜物語』翻訳)と、三田は優れたイスラーム学者を排出している。

○主人公紹介/ イブン・バトゥータ=西暦1304年モロッコ・タンジール生まれ。1325年メッカ巡礼の旅に出る。1326年メッカ巡礼(第一回)。1333年デリー到着。法官として1342年まで滞在。1342年中国元朝への旅で異教徒に襲われる。1343年マルティブ(モルティブ)スリランカの旅、1344-1346年ベンガル、スマトラを経て泉州・杭州・杭州から元の大都に行く。1350-51年故郷タンジールに戻る。グラナダ訪問。1352年サハラ砂漠横断の旅。1355年『旅行記』口述筆記。1368または69年死去。(本書年表を元に作成)

■筆者/ 家島彦一1939年東京生まれ。慶應義塾大学大学院修士課程修了。東京外国語大学名誉教授、文学博士。専攻はイスラーム史・東西文化交渉史。イブン・バトゥータ『大旅行記』翻訳(全8巻、平凡社東洋文庫)。2011年『インドの驚異譚』(平凡社東洋文庫)で日本翻訳出版文化賞を受賞。

■書誌/ 初版平凡社新書2003年10月発行。再刊平凡社ライブラリー2022年12月発行、文庫本319頁